

堺で校長せんせい！



「教員免許がなくても校長になれます」 そんなネットニュースをみて

——はじめに、自己紹介をお願いします。

木嶋と申します。以前は長野県の民間企業の公教育部門に勤務し、主に ICT プロジェクトの推進と外国語の授業の研究をしていました。当時はさまざまな自治体の学校現場に足を運び、先生方と授業のあり方を模索していました。特に外国語に関しては小学校の授業が教科となる時期でもあり、授業研究や職員研修を担当していました。そのような中で、コロナ禍が起こり、一斉休校の影響もあり、ICT 活用のニーズが急速に高まりました。これを受けて ICT プロジェクトをスタートして、以降は学校での ICT 活用を推進するための支援を中心に活動していました。

——堺市の任期付校長になろうというきっかけは何だったんですか。

堺市の任期付校長を募集しているというネットニュースです。教員免許がなくても校長になれますというようなタイトルで、思わず「えっ」と驚き読み進めました。そこには堺市が求める人物像の概要が書かれており、「ICT 推進」や「外国語」といったキーワードを見て関心をひかれました。これまで教育現場に関わらせていただいていた経験が、立場が違ってもきっと役に立つのではないかと思い、応募を決意しました。初めて堺市を訪れ面接を受けた際、思ったより遠くなく、都会すぎず住みやすそうな街だと感じました。「もしかしたら今日が最後になるかもしれない」と思いながら臨んだ面接でしたが、ありがたいことに合格させていただきました。

きじま みゆき

木嶋 美雪 (堺市立南八下小学校長)

長野県の民間企業から、本市の任期付校長公募に合格し、令和 5 年 4 月から現職。

堺市では、平成 24 年度から任期付管理職を採用しており、現在、17 人の任期付校長が勤務しています。その中から堺市立南八下小学校の木嶋校長にお話を聞きました。

前編 (全 2 回)

副校長としての研修でスムーズな着任に

——堺市では採用前の 1 月から 3 月にかけて、合格者のうち希望する方については、副校長として任用し現場に入りながら研修を受けていただく制度があります。木嶋校長も副校長として研修を受けられましたが、今振り返ってみていかがでしたか。

本来であれば 1 月頃から副校長として現場での研修に入る予定でしたが、前職の都合もあり、結果的に 3 月の 1 か月のみの研修となりました。それでも、そのような機会をいただけたことは非常にありがたく感じています。結果的に研修を行った学校と同じ学校に校長として着任することになり、非常にスムーズにスタートを切ることができました。前任の校長からは、学校運営に対する思いや、教職員の配置、学校目標の背景などを直接伺うことができました。例えば教職員の配置についても、先生方の顔を見ながら、「この先生はこういう思いで、この学年を担当されているのだな」とか、学校運営における組織づくりの背景などを、話と現場の両方から理解できました。そうした 1 か月の経験は、自分にとって非常に大きな意味を持つものでした。当時はまだ自分がその学校に後任として入るとは思っていませんでしたが、一人の校長モデルとして、直接お話を伺い、現場でその考え方を体感できた時間は、今の自分の土台になっていると感じています。

こどもも先生もかわいかった。

地域の方はとにかく熱い。

——校長としての着任時、学校のこどもたち、先生たち、地域の方の印象はいかがでしたか。

先生、こどもはとにかくかわいかったです。

——先生たちも、ですか。

先生たちがとても若い。長野県の学校に関わっていた頃は、自分より年上の方が多かったのですが、こちらに来てみると状況が逆転し、特に本校では20代、30代の先生が2/3を占めています。初めての社会人経験として、この学校が1校めという先生も多く、なんてかわいらしいんだろうと感じました。この人たちをどう活かし、どうすれば幸せに働いてもらえるかという視点で、学校運営を考えるようになりました。

また、地域の方々も、非常に熱心で、前任の校長先生からも「熱い地域」だと伺っていました。最初にご挨拶に行った際には、堺市出身ではない自分が受け入れてもらえるか不安もありましたが、学校を良くしようという思いは共通しており、会話を重ねる中で、学校のため、こどもたちのため、という一貫した強い思いが伝わってきました。お願いすればすぐに動いてくださる、そんな地域の方々の存在は本当にありがたく、心強いです。

マインドと仕組みを同時に変える

——逆にギャップ、今までのお仕事との違いを感じる部分はどこですか。

民間企業と教職員、学校現場の大きな違いのひとつは、先生方の働き方にあると感じています。

例えば民間企業では、オフィスにいて何時まで残っているかによって光熱費がかかり、移動すればその分の交通費も発生します。さらに、仕事に費やす1分1秒が時間給として換算され、費用対効果や利益とのバランスを意識しながら働くのが一般的だと思います。一方、学校現場ではその意識が比較的低い傾向があります。もちろん、費用対効果を気にせずこどもたちのために純粋に働くことができるという点は、教育現場ならではの良さでもあります。ただ、学校を預かる立場としては、夜遅くまで残っていることが必ずしも良いこととは限らないとも感じています。自分がどの業務にどれだけの時間をかけているか、今この時間は何をするためにあるのか、そうしたことを少し意識してもらえただけで、働き方や業務の質が変わってくるのではないかと思います。

——その違いやギャップ、感じたことを職員に話をし、新たな気づきにつながったことはありますか。

例えば、「紙を減らしてください」と言ってもなかなか実現できないため、校務のDX化と合わせて取組を進めました。当時は児童がICT機器を使うことはできていたものの、校務に関してはまだそこまで活用が進んでいない状況でした。Teamsが導入されているにもかかわらずほとんど使われておらず、資料は紙で印刷・配付される状況でした。そこで、まずは校務におけるICT活用から始めました。校務のDX化を進める中で、自然と必要な紙の量が減り、印刷の無駄も削減されるような仕組みを整えました。同時に教職員の働き方に対するマインドセットの変革にも取り組みました。例えば、「何の業務にどれだけの時間が必要だから残りたい」という申請をしてもらうようにしました。これにより、放課後の時間の使い方を意識するようになり、業務の優先順位や時間配分を考えるきっかけになりました。「今日は絶対に丸つけをしなければならない」、「通知表の評定を記入しなければならない」という業務に対して、「2時間で終わる」と決めて取り組むことで、実際にかかった時間とのギャップを意識し、自分の業務の整理につながっていきました。このように、マインドと仕組みの両面からアプローチすることで、時間外滞在時間は大きく短縮されました。結果として教職員が定時に堂々と帰宅できるようになり、その姿がモデルとなって、他の先生たちも「自分もそうありたい」と意識するようになりました。特に子育て中の教職員にとっては、どうすれば効率よく業務を終え、早く帰宅できるかという視点が重要です。現在では、以前よりもずっとスムーズに退勤できる環境が整っていると感じています。



「授業はできるだけ見たい。体験したい。」

後編へ続く